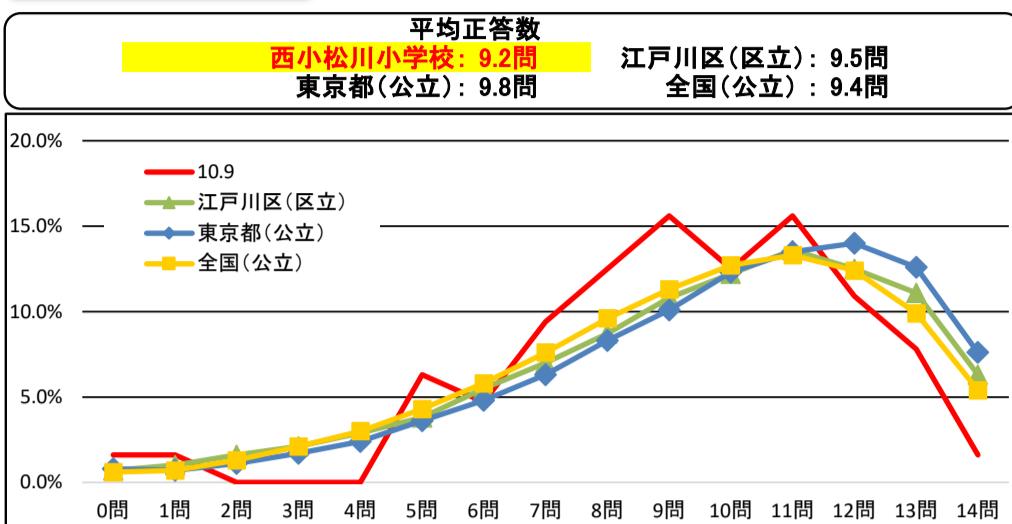


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【国語】西小松川小学校

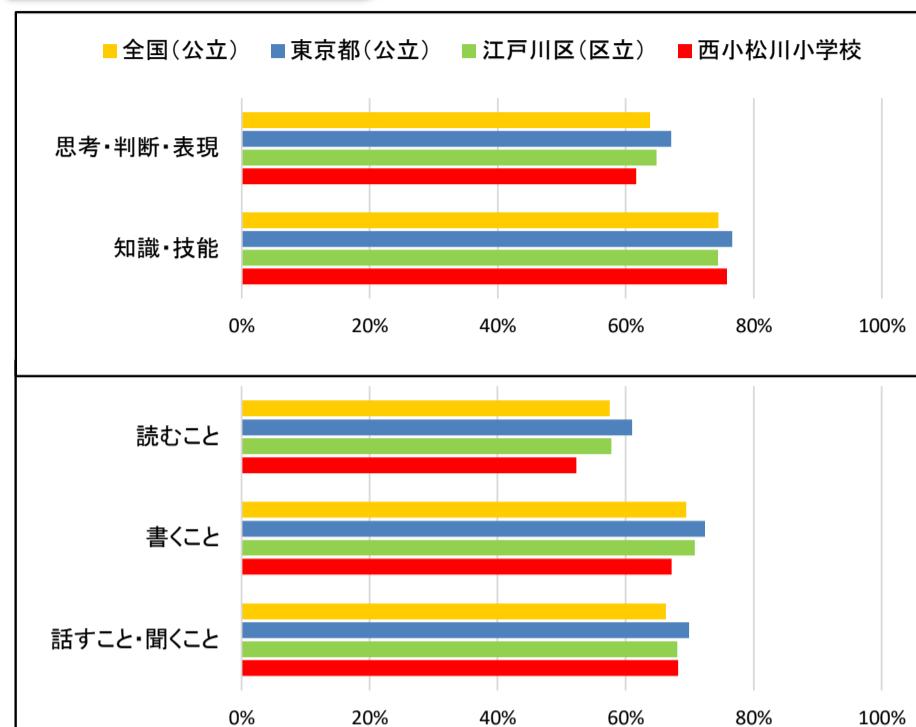
正答数分布



【平均正答率の差】

西小松川小学校	66%
江戸川区(区立)	68%
東京都(公立)	70%
全国(公立)	66.8%
都との差(ポイント)	-4.0

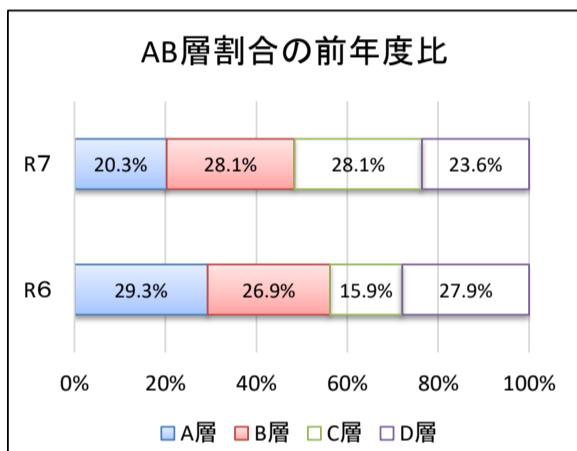
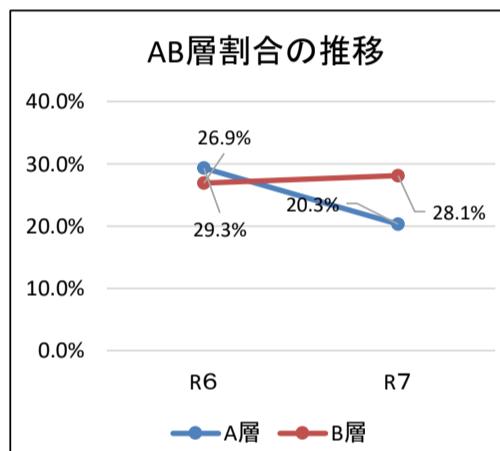
「領域別」の結果



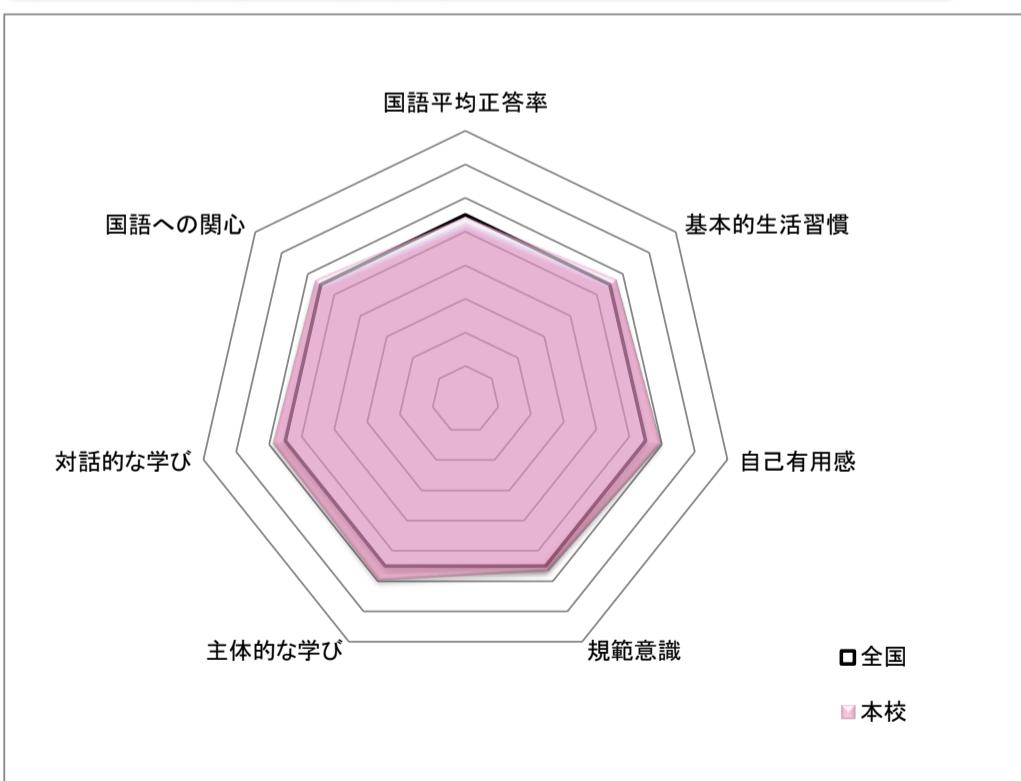
四分位における割合 (都全体の四分位による)

国語	A層	B層	C層	D層
	12~14問	10~11問	8~9問	0~7問
西小松川小学校	20.3%	28.1%	28.1%	23.6%
江戸川区(区立)	30.0%	25.8%	19.5%	24.7%
東京都(公立)	34.4%	25.8%	18.4%	21.4%
全国(公立)	27.7%	26.0%	20.9%	25.4%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答回計値を基準とした場合の、本校の様子。



チャートの特徴

本校児童は「自己有用感」では高い割合を示している。「基本的生活習慣」についても高い割合を示していることから、整った生活の中で周りの大人からの適切な支援や声かけがある中で成長している様子がうかがえる。

一方「主体的な学び」では、国語科の授業について自信がなく発表について消極的になっている傾向が読みとれる。

家庭・地域への働きかけ

日頃から、家庭学習の充実のために、保護者の協力をいただきながら、学習の継続性、連続性を確保していく。特に、音読や読書などの学習の推進を家庭にも呼びかけ学習の原動力となるような環境を整えていただく。毎学期はじめの「生活リズムカード」を活用して、長期休暇明けでも学校での生活がスムーズに始められるようにする。

現状把握

●AB層の割合と取組内容について

昨年度と比べてAB層が10%程度下がっている。「知識・技能」に関する問題は全国平均より高い正答率を示していることから、「思考・判断・表現」に課題があると考えられる。

特に「読むこと」の力を高めるために、授業で扱う文章の意味調べに取り組み、語彙を増やしたり、根拠を探しながら自分の読みを深めたりする学習に継続的に取り組む必要がある。

本校は、外国籍児童の割合が高く(約20%)、国語の学習に困難を要している児童が少なくない。日本語指導の充実と合わせて、学力向上に取り組んでいく。

学校の取組

・教員の指導力向上

「学習のゴール」を意識して授業計画を立てられるよう、学習指導力を向上させる。児童が他者との交流を通して読みを深めたり、自分の考えを表現したりできるように授業改善を行う。そのためにはICT等も積極的に活用しながら、「児童主体」の授業が行えるようにする。

学習に対する様々な「バリア」の解消のため、学びのユニバーサルデザイン(UDL)の視点で、可能な限り一人一人の児童に合わせて学習方法を提案できるようにする。

・基礎学力の保障

本校で実施している毎学期末の「全校漢字テスト」の指導を継続して行い、学年に合った語彙力を確実に身に付けさせる必要がある。

「読書」の習慣を身に付けさせ、「読むことへの抵抗感を減らしていくことが重要であると考える。そのため、「読書科」の充実に取り組む。

外国籍児童については、日本語指導の時間を週1時間程度設け、基礎的な日本語を身に付けさせていく。

・学習習慣の確立

学習習慣の確立のために家庭と連携して、「学年×10分以上」の学習を推奨する。

週末の家庭学習で、タブレットのドリル学習を課題として取り組み、一人一人の学習状況を把握し、必要に応じて個別に指導を行うなど、児童が主体的に学習に取り組めるように支援する。

・AB層の育成

江戸川区の事業である「よむYOMUワークシート」を活用しながら、教科書以外の文章にも触れさせ、文章と資料を合わせて読みとる力を身に付けさせていくことがAB層の割合を高めることにつながると考える。

文章を論理的に読み、そこから自己の考えを表現することで、「書く」力の向上にもつながると考える。